

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 4 日現在

機関番号：44518

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370957

研究課題名(和文) 現代社会における先住民生存捕鯨の社会文化的意義

研究課題名(英文) Socio-Cultural Significance of Aboriginal Subsistence Whaling in Modern Societies

研究代表者

浜口 尚 (HAMAGUCHI, Hisashi)

園田学園女子大学短期大学部・その他部局等・教授

研究者番号：30280093

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、カリブ海、セント・ヴィンセントおよびグレナディーン諸島国ベクウェイ島における「先住民生存捕鯨」の社会文化的意義について調査を実施した。ベクウェイ島では、捕鯨をホエール・ウォッチングに転換することをめざす反捕鯨NGOが、2014年に捕鯨活動の中心であった銚手から捕鯨ボートを買収、同銚手は捕鯨から引退した。その結果、活動中の捕鯨チームは2チーム、捕鯨ボートも2隻となり、同島の先住民生存捕鯨は弱体化した。引退した銚手と元捕鯨者の計2人がNGOの援助を受け、ホエール・ウォッチングの創業を準備している。4年の研究期間中にベクウェイ島の先住民生存捕鯨を取り巻く社会文化的状況は大きく変貌した。

研究成果の概要(英文)：This study examined the socio-cultural significance of the "aboriginal subsistence whaling" among the people of Bequia, St. Vincent and the Grenadines. In 2012, an anti-whaling NGO launched a campaign aimed at converting whaling into whale watching in Bequia. In 2014, the same NGO bought a whaling boat from the most skillful harpooner who had led his whaling team since 1996. This purchase caused a stir within the local community, which had a well-established whaling tradition. As of 2017, two whaling teams and two whaling boats still operate in Bequia. However, the whaling activities have slowed due to the retirement of the most skillful harpooner. The retired harpooner and another ex-whaler have begun to prepare for the whale watching business with some financial aids provided by the NGO. During my research period, the socio-cultural circumstances surrounding the aboriginal subsistence whaling among the people of Bequia have changed considerably.

研究分野：文化人類学

キーワード：先住民生存捕鯨 捕鯨文化 国際捕鯨委員会 ホエール・ウォッチング 反捕鯨運動 ベクウェイ島

1. 研究開始当初の背景

(1)「先住民生存捕鯨」とは国際捕鯨取締条約附表第13項(b)において承認されている捕鯨の一形態である。2012年時点では、米国アラスカ州の先住民イヌピアットとユピートによるホッキョクジラ捕鯨、ロシア連邦チュコト自治管区の先住民チュクチ、ユピートによるコククジラ捕鯨とホッキョクジラ捕鯨、デンマーク領グリーンランドの先住民カラーリットによるナガスクジラ捕鯨、ホッキョククジラ捕鯨、ザトウクジラ捕鯨、ミンククジラ捕鯨、セント・ヴィンセントおよびグレナディーン諸島国ベクウェイ島民によるザトウクジラ捕鯨、米国ワシントン州の先住民マカーによるコククジラ捕鯨が実施可能とされている。但し、は米国の国内政治事情により一時停止されている。

(2)その先住民生存捕鯨の実態は次のとおりである。米国アラスカ州の先住民イヌピアットは捕鯨を実施するために年間4万ドル以上の経費が必要であるが、米国政府が鯨産物(鯨肉、脂皮など)の現金販売を認めないため、他の仕事に従事することによりその経費を賄っている。ロシア連邦チュコト自治管区の先住民チュクチは村の公営企業に雇用され、捕鯨やアザラシ類の狩猟に従事することにより賃金の支払いを受け、一方、村人は現金により鯨肉を購入する。グリーンランドにおいては、ナガスクジラ捕鯨は捕鯨砲を装備した近代型の捕鯨船により実施され、鯨産物は捕鯨従事者にとって必要不可欠な現金収入源となっている。ベクウェイ島における捕鯨はヨーロッパ系およびアフリカ系移住者の子孫により実施され、捕殺されたザトウクジラの鯨産物(鯨肉、脂皮など)は島民に現金販売されている。捕鯨従事者は入手した現金により、捕鯨の必要経費を賄い、捕鯨を維持している。

(3)これらの実像は、一般的な先住民生存捕鯨のイメージ、「辺境の地に住む先住民が自らの生活のために命を賭けて鯨を捕っている」とは大きく異なっている。このようなイメージと鯨類資源の持続的利用よりも鯨類資源の保護が優先する西欧的価値観の中で、近年、先住民生存捕鯨もできる限り狭義に考え、その実施を制限していこうとする動きも活発になっている。筆者の調査地であるセント・ヴィンセントおよびグレナディーン諸島国ベクウェイ島においても捕鯨をホエール・ウォッチングに転換させようとする反捕鯨NGOが活動を始めている。このような捕鯨民の生活の現実を無視した虚構の先住民生存捕鯨像に基づく反捕鯨国および反捕鯨NGOの動きに対して、現地の実情を知る私たち文化人類学者は先住民生存捕鯨研究の再構築を迫られているのである。

2. 研究の目的

(1)ベクウェイ島内の捕鯨実施2コミュニティおよび周辺地域における参与観察、聞き取り調査により、先住民生存捕鯨の実施状況にかかる基礎的資料を収集すると共に、同コミュニティにおける当該捕鯨のもつ社会文化的意義を解明し、あわせてセント・ヴィンセントおよびグレナディーン諸島国全体の社会文化的文脈における先住民生存捕鯨の位置づけをより明確にする。

(2)さらに、それらの事実に基づいて、先住民生存捕鯨が内包する問題点、矛盾点などを現代的視点から考察し、鯨類保護という西欧的価値観が優先する国際関係の下でのベクウェイ島の先住民生存捕鯨および他地域の先住民生存捕鯨の次世代への継承をめざして、先住民生存捕鯨の新しい枠組みを確立する。

3. 研究の方法

(1)ベクウェイ島内の捕鯨実施2コミュニティおよび周辺地域において、先住民生存捕鯨にかかる参与観察および聞き取り調査を実施し、ベクウェイ島の先住民生存捕鯨にかかる基礎的資料を収集する。

(2)セント・ヴィンセントおよびグレナディーン諸島国農林水産省水産局および国家安全省グレナディーン諸島問題局ほか政府関係機関、大学ほか研究機関、NGO(捕鯨擁護/反捕鯨の双方)などにおいて先住民生存捕鯨関係の聞き取り調査を実施すると共に関連文献を収集する。

(3)収集した各種資料を基礎にして、ベクウェイ島の先住民生存捕鯨にかかる問題点、課題などを整理したうえで、他地域の先住民生存捕鯨の事例を随時参照しながら、可能な範囲内で先住民生存捕鯨の新しい枠組みを提示する。

4. 研究成果

(1)捕鯨関係者間における鯨産物(鯨肉、脂皮など)のシェア・システムによる分配、捕鯨関係者から親族、友人への鯨産物の贈与および島民への現金販売が、島中に鯨産物を行き渡らせることを可能にしている。ベクウェイ島民は、少なくとも年に一度鯨産物入手し、食することにより捕鯨の島の住民であることを再認識している。そしてその再認識が地域社会における捕鯨文化の擁護継承に役立っていることを確認した。

(2)手漕ぎ・帆推進の捕鯨ボートに乗り、手投げ鉞とヤスによりザトウクジラを仕留めるといった旧来の捕鯨方法を用いる限り、ベ

クウェイ島のザトウクジラ捕鯨は捕りすぎない捕鯨、捕れすぎない捕鯨、すなわち結果としての資源の持続的利用型捕鯨となっている。また、過去においては母仔連れに見える鯨を時には捕殺してきたベクウェイ島の捕鯨方法は、西洋人の眼には残酷に映るかもしれないが、実際には鯨捕りたちの安全面とザトウクジラ群の存続にとって最適の捕鯨方法であったことも判明した。

(3) ベクウェイ島の捕鯨においては、捕鯨者としての能力、捕鯨クルーをまとめることができる人望、そして捕鯨業を維持しうる資金力のある者が銚手となり、捕鯨を取り仕切ってきた。そこには捕鯨の自主管理制度と呼べるものが備わっていたのである。ベクウェイ島のような小規模地域捕鯨の管理は、国家の干渉をできる限り差し控え、捕鯨従事者に任せておくことが最善であるということを確認した。

(4) 北米および欧州からの避寒地であるベクウェイ島においては、長年に渡って捕鯨と観光は並存してきた。しかしながら、2012年に反捕鯨 NGO により捕鯨をホエール・ウォッチングに転換しようとする運動が始められ、2014年に同 NGO が当時捕鯨の中核人物であった銚手の所有する捕鯨ボートを買収、同銚手は捕鯨から引退した。その結果、活動中の捕鯨チームは2チーム、稼働中の捕鯨ボートも2隻となり、ベクウェイ島の先住民生存捕鯨は弱体化した。それが、過去4年間のザトウクジラの捕殺数3頭という数字にも表れているということを示した。

(5) 反捕鯨 NGO が買収した捕鯨ボートは米国帆船式捕鯨時代の捕鯨ボート建造技術を受継いできた最後のボートであり(現在稼働中の2隻の捕鯨ボートは漁船を改装したもの) その捕鯨ボートが捕鯨に使用されなくなった結果、捕鯨文化の一面が過去から断絶された。それが各国の反捕鯨団体にベクウェイ島の捕鯨が先住民生存捕鯨ではなくなったという主張の一つの根拠となっていることを確認した。

(6) 捕鯨から引退した銚手と元捕鯨従事者の計2名が反捕鯨 NGO からの財政的支援を受け、ホエール・ウォッチングの創業をめざして準備を進めている。筆者が調査研究に従事した4年間において、ベクウェイ島の先住民生存捕鯨は大きく変貌したという事実を正確に記録に留めた。

(7) 現代社会における実施可能な先住民生存捕鯨として、「捕鯨に文化的、栄養的、経済的必要性があり、かつ捕殺対象となっている鯨種が絶滅の危機に瀕していない限り、先住民生存捕鯨を含めて、いかなる形態の捕鯨も容認されるべきである」とする枠組みを案

出した。

(8) 中長期的(10~15年以内)には、ベクウェイ島の先住民生存捕鯨は消滅すると(期待をこめて)主張する反捕鯨 NGO 関係者も存在する。筆者としては、今後の調査研究において、本研究では漠然とした形でしか提示しえなかった現在社会における実施可能な先住民生存捕鯨の枠組みの精緻化に努めると共に、ベクウェイ島の先住民生存捕鯨の次世代以降への継承に向けての方策についても鋭意検討していく所存である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

HAMAGUCHI, Hisashi, A Note on the Feasibility of Whale Watching in Bequia, St. Vincent and the Grenadines, *Senri Ethnological Studies*, 査読有, 2017, in press.

浜口 尚, 「国際捕鯨取締条約」附表の修正からみたグリーンランド捕鯨 特にザトウクジラ捕鯨を中心に、園田学園女子大学論文集, 査読有, 50巻, 2016, 29-57.

HAMAGUCHI, Hisashi, Whale Watching: Trouble on the Small Whaling Island of Bequia, *Japanese Journal of Cultural Anthropology*, 査読有, Vol.16, 2015, 59-67.

浜口 尚, ホエール・ウォッチング 小さな捕鯨の島ベクウェイ島の厄介な問題、園田学園女子大学論文集, 査読有, 49巻, 2015, 55-65.

[学会発表](計4件)

HAMAGUCHI, Hisashi, Growing Pro-Whale Watching Campaign on the Small Whaling Island of Bequia, 11th Conference of Hunting and Gathering Societies, September 9, 2015, Vienna, Austria.

浜口 尚, 厄災としてのホエール・ウォッチング 外圧にゆれる捕鯨の島・ベクウェイ島、日本文化人類学会, 2015.5.31, 大阪国際交流センター(大阪府)

浜口 尚, ホエール・ウォッチング 小さな捕鯨の島ベクウェイ島の厄介な問題、日本セトロロジー研究会, 2014.5.25, 愛媛大学(愛媛県)

HAMAGUCHI, Hisashi, Whale Watching: Trouble on the Small Whaling Island of

Bequia, International Union of
Anthropological Sciences 2014, May 14,
2014, Makuhari Messe, Chiba.

〔図書〕(計1件)

浜口 尚、岩田書院、先住民生存捕鯨の
文化人類学的研究 国際捕鯨委員会の議
論とカリブ海ベクウェイ島の事例を中心
に、2016、204.

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.sonoda-u.ac.jp/shokubun/hamaguchi/gyoseki.htm>

6. 研究組織

(1)研究代表者

浜口 尚 (HAMAGUCHI, Hisashi)

園田学園女子大学短期大学部・教授

研究者番号：30280093